

研究発表会の振り返り

第6学年社会科

「江戸幕府265年のなぞにせまる」

～吉宗と宗春の政治～

授業者 西川 恭矢

本時の主張点

各資料や既習事項をもとに吉宗と宗春を比較しながら対話させることで、考えを省察し、多角的な立場から価値・判断をする姿がみられるようになるだろう。

1. 授業づくりの「しかけ」と子どもの探究

◎ 本時における授業づくりの「しかけ」

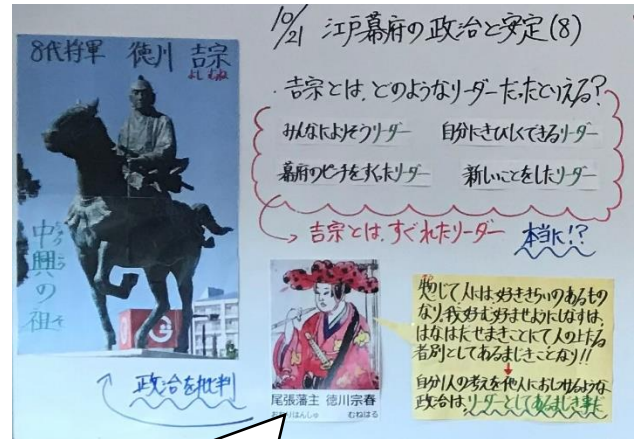
本時では、問題解決的な学習におけるそれぞれの場面で「①学習問題を子どもの学びたいに転化するしかけ②考えの違いを可視化し、対話を生むしかけ③既習を活用させながら価値・判断させるしかけ④自分の学びの深まりを自覚させるしかけ」を取り入れた。

これらのしかけは、子どもの主体・協働・活用・省察の姿を引き出すためのしかけである。

①学習問題を子どもの学びたいに転化するしかけ（主体）

自分たちが通う学校の近くに吉宗像があることに興味をもった子どもたちは、前時で「なぜ、吉宗の銅像が建てられているの？吉宗の功績について調べよう。」という学習問題を設定し、調べ学習を行っている。本時は、前時における子どもの振り返りから授業をスタートさせた。

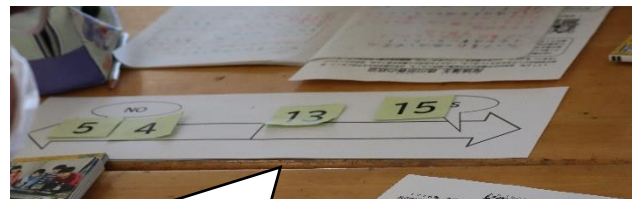
これまでの学習を通して吉宗を好意的に捉える子どもに対して、その政治を批判した尾張藩主、宗春の存在を提示することで、「江戸時代のピンチを救うべく、自らも進んで質素・儉約に取り組む吉宗の政治をどうして批判するの？」という疑問が生まれる。このような子どもの「？」こそが、主体的な探究を支える土台になると考えた。



郷土の偉人でもある、吉宗のリーダーシップを痛烈に批判した宗春をその姿とともに提示した。「質素・儉約の時代なのに、尾張の藩主がこの格好はおかしい」「自分が将軍になりたかったからじゃないの？」子どもたちは、宗春に対して感じたことを口々に発言した。

②考えの違いを可視化し、対話を生むしかけ（協働）

本実践における「吉宗は本当にすぐれたリーダーといえるのだろうか？」という学習問題は、YES・NOだけで判断できるものではない。「YESよりだけど、すべてを認めているわけではない」等、子どもの詳細な考えを可視化するためにスケール図を用いた。また、それぞれの考えを可視化することで、自分と他者の考えの「違い」が明確になる。この違い（考えのズレ）が「〇〇さんの意見を聞いてみたい」「〇〇くんに考えを伝えたい」といった「対話の必然性」につながると考えた。



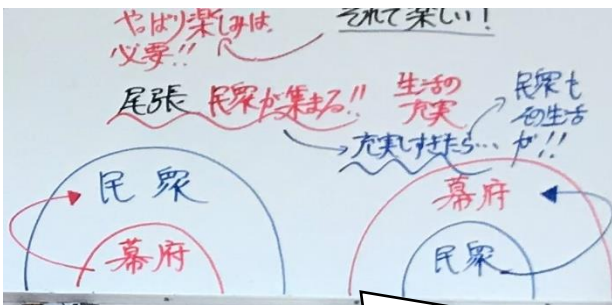
各班での対話は、スケール図を活用して行われた。考えの違いが明確なため、話す力のある子どもが一方的に自分の考えを話すのではなく、「〇〇さんは、なぜそこへおいたの？」等、お互いの考えを聞き合う姿が見られた。



グループ活動のゴールとして、各グループで考えをまとめる（グループでカードを置く位置を決める）ことを設定した。それぞれ考えの違う他者と調整しながら、価値判断する必要があるため、身振り手振りを交えながら対話に熱中する姿も多く見られた。

③既習を活用させながら価値・判断させるしかけ（活用）

民衆の不満といった視点のみから吉宗の政策を評価する子どもに対しては「吉宗の目的は幕府をたて直すことでしょ？それに対して自らも質素・儉約に取り組んでいるのにすぐれたリーダーではないの？」という問いを投げかける。また、幕府による支配を肯定的に捉える子どもに対しては、「では、国を守るためにならそこで暮らす人々の幸せは実現されなくてもいいの？」という問いを投げかける。さらに板書によって、「幕府があるから民衆が安定した生活を過ごすことができるのか？」それとも「民衆の幸せ（幕府に対する不満が少ない）があるから幕府が安定するのか」を構造的に示すことで、より多角的な視点から江戸幕府の政治について考察することができると考えた。



「安定した幕府があるから民衆の生活が守られるのか？」それとも「民衆の幸せが維持されるから幕府が安定して政権を担うことができるのか？」それぞれの考えを構造的に示すことで、子どもの対話を焦点化した。

④自分の学びの深まりを自覚させるしかけ（省察）

学習問題に対して、授業の終末に再度考えを意思表示させる時間を設定し、学びの変容や深まりに気付かせるようにした。自分の学びを俯瞰的に捉えさせることで、省察性を働かせながら学びを捉え直すことができる。また、このような活動は「1人では、納得いく答えが出せなかったけど、みんなとのかかわりを通して、自分の考えは深まっていく」という学び方に対しての振り返りにもつながると考えた。



授業を通して、はじめの考えから大きく考えを変えた子どももいる。このように何度も同じ問いについて考える時間を設定することで、「社会には簡単には判断できないことがほとんどだ」という見方・考え方を身に着けていく。また、学習の振り返りには、「はじめは～と思っていたけど、〇〇さんの話を聞いているうちに考えが変わって～という考えもあると思った。」という記述も見られた。

◎ 本時における教師による評価

本時では、「歴史から学ぶ」をテーマに幕府のピンチにおける政治について多角的な立場から考え、自分の考えをもつことを学習のゴールと設定した。期待する子どもの記述（振り返り）としては、「吉宗の政策にもメリットとデメリットがあって吉宗がすぐれたリーダーかどうか判断するのはすごく難しかった。ピンチだから、ある程度儉約することも大切だけどそれでは民衆の不満が高まってしまう。こういう政策は、そのあたりの

バランスを考えることがすごく大切だと思った。そしてこれは今のコロナ対策にもいえることだと思った。」「今回の授業をとおして学んだことはやっぱり、いろいろな物事は簡単には判断できないということだ。確かにそこで暮らす人々が我慢ばかりしてはよい時代とは言えないけれど、ピンチのときにはそれも仕方がないことなのかもしれないと思った。安定した国があるから人は幸せでいれるけど、その安定した国をつくるために人が幸せになれないこともある。ピンチのときの政治ってすごく難しいと思う。今はコロナですごく日本もピンチだから、どういう政策がいいのか考えたいと思った。」等があげられる。

本学級の子どもたちは、民衆側の立場に立って、歴史的事象を捉えることが多々ある。やはり、民衆の気持ちは自分自身を重ね合わせ、想像することが容易であるからであろう。実際、吉宗の功績について調べる学習においても、財政を立て直したことよりも目安箱を設置し、民衆の意見を聞いたことに心を動かされた子どもが多かった。（吉宗の功績についてのまとめでは、クラスの約7割が吉宗はこれまで学習してきた将軍やリーダーに比べ民衆のことをすごく大切にしているといった趣旨の振り返りを書いている。）このような子どもの実態から、授業は、「吉宗の政策は民衆のためであったかどうか？」が対話の中心になると予想した。「質素・儉約や増税が厳しすぎるから民衆のためではない。」「でも、目安箱を設置して、民衆の声も大切にしている。」以上のような考え方が、すぐれたリーダーかどうかの価値判断の中心になると考えたのである。

このような授業者の構想に反して、子どもたちは授業の前半から、吉宗の政治の一番の目的（財政を立て直し）を踏まえた上で自分の考えを述べていた。その典型が、これまで歴史的事象を民衆の立場から捉えることが多かったA児を指名した場面である。授業者としては、「吉宗は民衆を大切にしていると思っていたけど、実際にはそうでは

なかったと知ってびっくりした。吉宗はすぐれたリーダーではないのかもしれない。」といった趣旨の発言を期待していた。しかし実際は「宗春は民衆に自由度の高い生活をさせていたから最高のリーダーと呼ばれていたのだろうけど、私は吉宗の方が正しいと思ってるんよ。だってこれは江戸（幕府）のためやん？だからやっぱり日本を守る吉宗の方が正しいと思います。」と発言したのである。民衆の立場の意見を支えるための根拠となるべき宗春の資料が、教師の意図とはちがう形で活用され「国のピンチでみんながひとつにならなければならないのに、勝手な事をする人物」という理解につながっているのである。

また、スケール図に意思表示する段階では、真ん中に置いたB児が「だってNOやったら民衆にとって悪いやんか。けど、YESやったら自分たちの日本がやばい状態やから、どっちをとったらいいかわからん。」と発言している。B児の発言からも、すでに「全体を守るか」か「個の自由を保障するか」の中で価値判断することができていることがわかる。その後に発言したC児は、「でもいくら質素・儉約でも、例えば今の時代、映画も何もかもダメってなったらみんないややろ？」と実際の生活と関連付けながら当時の民衆の生活について話すのが、子どもたちの思考を揺さぶるまでには至らなかった。グループで話し合いが行われた後も、D児の「どんどんお金を使ってたら国が貧乏になるやん。尾張での生活（民衆の自由度が高い生活）に慣れすぎてたら生活ができなくなる。」といった発言が多く共感を得た。

その一方で、授業者が意図したように「この時代って今のコロナの時代とすごく似てるやん？宗春の政策ってG o T o キャンペーンみたい」といった対話が聞かれるなど、現代社会の課題と歴史的な事象を結び付けて話す子どもの姿もみることができた。しかし、江戸時代の日本（身分制によって民衆の生活が制限されている時代）と今の日本（国民主権によって国民の政治参加が保障されて

いる時代)が同じ仕組みであるかのように捉えた対話も聞かれた。もちろん、国がピンチのときは、それを乗り越えるために国民全体で協力しようとする姿は大切である。しかし、江戸時代における国とは、あくまで徳川による政権である。

「国のピンチを乗り越えるための政策は、国民に主権がある上で決定されるべきである」といった理解にまでつなげることが社会科の使命であると考える。

本時では、子どもたちの理解をそのレベルまで到達させることはできなかったが、今後の授業を通して「やっぱり国民主権はすごく大切な権利なんだ。長い歴史をかけて手にしたこの権利を積極的に使って、自分も政治に参加していきたい。」といった思いを子どもがもてるようにしたい。

2. 子どもの振り返り

宗春の資料が、民衆の視点から吉宗の政治を再評価するための「しかけ」として、十分にその効力を発揮しなかった。そのため、27名中8名が幕府のピンチにも関わらず、節約をしない民衆を否定的に捉える趣旨の振り返りを記述した。

その一方で、授業者が設定したゴールに達する記述も見られた。

私ははじめ、吉宗が民衆思いで欠点のないリーダーだと思っていました。けれど人によってその感じ方が違うのかなと思いました。なぜなら、今といっしょで「いまは、国全体で協力して、コロナを減らすべきだ」と考える人もいれば、「国を元気にして、どんよりとしたつまらない世の中をGo Toキャンペーンで変えよう」と考える人もいます。けれど私はこういう時だからこそ、みんなで協力して乗り越えるのが大切なんじゃないかなと思いました。世の中っていうのは、対立したら、すぐれたリーダー同士の戦いになると思います。人によってどんなことがすぐれているという感じ方が違うと思ったからです。宗春が

すぐれたリーダーと感じる人もいれば、吉宗がすぐれたリーダーと感じる人もいます。そこで、違う視点から見るができる。自分と違う意見をもった人と話し合うことで世の中がもう一つランクアップすると思いました。

本児が振り返っているように「自分と違う意見をもった人と話し合うことで世の中がもう一つランクアップする」という考え方は、まさにこれからの社会を生きる子どもに身につけさせたい公民的な資質である。歴史学習を通して、このような価値に気付くことこそ、「歴史から学んでいる姿」といえるのではないだろうか。

3. まとめ

今回の研究発表会は、オンラインでの配信ということもあり、自分が行った授業の動画を編集する機会があった。あらためて自分の授業を見てみると、子どもの発言(子どもが真に伝えたいこと)をつなぐのではなく、授業者の都合のよいように解釈し、あらかじめ設定していた学びの筋へと半ば強引に展開してこうとする姿が多々みられた。なぜ、子どもの「真に伝えたいこと」に耳を傾けることができなかったのだろうか。授業における自分自身の姿を振り返ってみると、「子どもの発言を理解しよう」ということよりも「この子とあの子の発言をいかにしてつなげよう」や「この発言をどのように使って授業のゴールへもっていこう」といったことが頭を中心にあつたことがわかった。もちろん、限られた時間の中で、学びに変容を生むためには、子どもの意見すべてに耳を傾けることはできない。しかし、今一度「子どもは真に何を学びたがっているのか。」「何を伝えたがっているのか。」に耳を傾け、授業を展開していく必要性を感じている。

今後は、「子どもはいかにして学ぶのか」を授業づくりの中核に据えて、実践を行っていきたい。